

蔭涼寺と白隠及關係の人々

——鐵心道印・慧極道明・壽鶴道人・格宗淨超——

陸 川 堆 雲

白隠和尚の傳記中に於て逸話的に傳唱さるゝ左の和歌のある事は有名である。

聽せばや信田の森の古寺の小夜深けがたの雪の響を

此の和歌は白隠和尚が泉州信田の蔭涼寺の禪堂で夜坐をして居た時のもので頗る感慨に充ちた和歌であるが、是は白隠和尚が二十九歳の冬のことである。白隠和尚が正受老人の許を離れたのは二十五歳であつて、其後數年間各地各所を轉々として猶も求道行脚の旅をつゞけて居るのであるが、是も其時の事であつた。白隠年譜正徳三年師廿九歳の條を見ると、左の様に記されている。

嘗て鐵心の名を聞く、他化し去ると雖も必ず遺風有らん。以て鑑む可しと直に泉州に向ひ錫を蔭涼に掛く。禪規但だ嚴然たるのみにして頗る鐵心の古風を失す。一日衆に隨つて後園を灑掃す、把茅の陋室ありて大涅槃經を机上に安ず。師恠みて僧に問ふ、是れ何人の居ぞ。僧曰く壽鶴道人と云ふ者あり、久しく鐵心に待す。風度狂簡にして人と交らず、師之を物色するに醜面敝衣、形ち狂人に似たり。是と語らんと欲して纔かに近づくときは則ち之を避く。逐つて路頭盡くる處に至て遙かに衣を捉へて曰く、老兄且ばらく住どまれ。我れ遠く鐵心の風を慕ふ、故に來て錫

を掛く。願くは我爲めに他の平生の示誨を擧せよ。鶴愕然として曰く、東西を回看するに眞風地に墮つ。未だ一箇も先師の道を問ふ者を見ず、子何ぞ獨り此の言を爲すや。便ち閑に乗じて時々鐵心の作用を語る。一夜坐して曉に徹し、雪を聽いて女子出定の大事に撞着す。和歌を詠じて曰く

として曩きの和歌が記されて居るのである。私は此の條を讀んで、何やら奇異の感を抱くと共に種々の疑問を起すのである。白隱和尚は正受老人の許にて大悟を得たりとなし、又他日再び來つて餘蘊を盡さんと云ひ、滯留すること僅かに八ヶ月計りにして辭去し、而かも正受老人は其後十三年間も生存せられたるに拘はらず、再び老人を訪ふことなく、其反面未だ心の平穩を得ず、修道未だ足らずとして、其解決の爲めに斯く轉々とする事數年の長きに亙り、各地を巡歷したのである。此の蔭涼寺の鐵心和尙は白隱が訪問せし時は、既に三十四年前の延寶八年に遷化されており、白隱は此の事を知つて居乍ら、其遺風を探ぐらんとして掛搭したとあり、而かも其翌年正徳四年の春まで約半年間も滯留したのである。鐵心和尙の遺風に接せんと考へたのは、和尙が遷化しても其後嗣に其人ありて、其教を受けんとならば一應説明はつくが、鐵心和尙は曹洞宗の人であり寺も曹洞宗であつて、正受老人の如き臨濟の宗風とは、自ら異るところであることなどは、如何に説明さる可きであらうか。

然らば何故に異宗の此の寺に態々行つたのであらうか。又行くことになつたのであらうか。是等の疑問を明らかにする爲め少し調らべることにする。同年譜正徳三年の後に左の様なことが記されて居る。

聞く若(若州)の鐵堂久しく石院(諱は宗蘊、久しく愚堂に侍し其蘊奥を究む。後に武州野火止の平林寺に住す。)に參じて別に長處有り。往いて鐵堂に圓照(尾崎の圓照寺)に侍す。夏終つて河(河内)の法雲(大寶山法雲寺)に往き慧極に謁して請益す。學人見道略ぼ其の旨を得たりと雖も、日用の上に於て眞個大安穩、大解脱の場に到らず、願くば示諭を給へ。極曰く、汝恠麼ならば須らく山中に向つて草木と共に朽死せんことを要すべしと。之に由

て槇尾山に登つて住菴を求む。山主許さず志を獲ずして還へる。嘗て鐵心の名を聞く他化し去ると雖も必ず遺風の以て鑑むる可き有らん、直に泉州に向つて錫を蔭涼に掛く……。

となつて居り、一應慧極和尚の指示により槇尾山に登つたが其目的を達せずして下山したと記し、蔭涼寺行とは何の關係もなき様に記されて居るが、實は慧極和尚の勸奨によつて蔭涼寺へ行つたのである。それは白隠の自傳たる壁生草まできさに左の如く記されている。

處々高名の智識を尋ねて、救ひを乞ふと雖も各々禪病と稱して手を下さず。最後に泉州慧極老和尚に參謁す。師云く禪病は醫治せんと欲せば轉た重もる。最も寂靜の處を尋ねて此の山の草木と共に朽ち果てよ。死に到るまで諸方に奔波すること莫れ。然りと雖も時々來謁せんが爲めに篠田の蔭涼洞家の禪堂を指して暫らく掛搭せしむ云々。

と記されている。白隠は禪病なるものに侵かされており、是を治さんと思つて各所に其救ひを求めたのであるが、其目的が達せられず慧極和尚に請益したのである。夜船閑話にある白幽真人を訪ねて内觀法の傳授を受けて病根を治し大安穩を得しのみならず多くの難透難解の公案も同時に解決が出来たと年譜にも夜船閑話にも、壁生草にも書かれて居るがそれは是の年より三年前の寶永七年廿六歳の時である。然るに猶も斯く諸方を行脚して居ることは甚だ辻褄の合はぬことと思はれる。

それは兎も角として、白隠は何故に慧極和尚を訪ねたのであろうか。當時は中國より道者、隱元、木菴、其他多數の禪僧が渡來し、徳川幕府は是を援護した。隱元は宇治に黄檗山を開創し、黄檗の禪風天下を搖がした時代で此の慧極和尚は、道者、隱元に參じ又木菴に參じ其法を嗣ぐに至つたのである。木菴の嗣法者は五十餘人と稱され、慧極和尚は門下三傑の一人であつた。三傑とは慧極道明、鐵牛道機、潮音道海の三人である。鐵牛道機は後に江戸鱗祥院、瑞聖寺等に住し、牛島の弘福寺を開創し、又下總國椿沼を招き新田八萬石を得たと傳へらる。潮音道海は上州に廣濟

寺を建て、學殖甚だ博ろく彼の大藏經の編纂に關係し大問題を起した傑僧にて黑瀧の潮音として知らるゝ人である。木菴は後に將軍家綱に謁し、黃檗山の山林田園の朱印を拜領、白金二萬兩をも賜はり黃檗山に天人師殿、佛殿等を造營し輪輿の美を極めた。又皇室より紫衣を賜ふの榮に浴する有様で洞濟の俊髦多く是に赴き實に天下を風靡するの概が有つた。猶ほ此外に十哲と稱さるゝ門下あり、其一人は彼の一切經開版によりて知らる鐵眼道光である。斯かる情勢の時期であるから白隠も自然慧極和尚を訪ねて教を乞ふたものと思はれる。而して慧極和尚は當時八十二歳、白隠は廿九歳であつたから年齢の差は爺と孫位であるが爲め壁生草に書かれてある通り白隠が弟子扱にされたのも無理がない。今少しく慧極和尚を知る爲めに其略傳の記すことにする。

師諱は道明、慧極と號す。長州萩城小田氏の子、母は岩佐氏、武門の家なり。寛永元年四月生る。五歳事によつて父を喪ひ叔父に養はれ母子俱に武州に徙る。九歳宇都宮興禪に投じ童子の役を執る。慶安元年十七歳祝髮慧班と稱す、後に慧極と改む。十九歳竺印長老と伴つて長崎に行き道者和尚に謁す、其崇福に遷るや師隨て行く。中華の商人不逞の曹あり流言して云く、日本の僧徒衣食乏しきが爲めに來つて養食すと。師聞て憤然として薩州に去り巨多の財帛を募り誘人の口を滅す。道者和尚是を賞して慧班の爲に托鉢の偈を作る。曰く

指に乾坤無底の鉢を托し。縱横露宿諸君を化す。果して粒々空界を藏することを明めば。施受同起す大覺尊。

二十二歳長崎を發ちて京都洛東泉涌寺に於て楞嚴の講を聴く。二十三歳また長崎に歸り道者和尚に崇福に侍す。萬治元年二十七歳。道者和尚唐に歸るに當り囑して曰く、吾れ既に子が志氣群ならざるを知る、他は必ず法門の柱梁とならん。若し打發の處あらば隱元和和尚に依て之を斷ぜよと。二十八歳春州の海潮寺にて首楞嚴を講ず。同年關を掩ふて龍鬚の古格に倣ふ。僧問ふ。法は見聞覺知に由らず、又見覺知を離れずと此意如何。師蒙然たり。爾來胸中躁悶行て歩を移すことを忘れ、坐して驟雨を忘る。二十九歳經行了て座に據らんとして誤て地に仆る、忽然として契悟す。投

機の偈に 曰く

霜辛雪苦十餘年。工夫を用ひ盡して未だ驗を得ず。本心の見聞を離るることを識てより。萬般の施設會て欠かず。萬治三年三十二歳、隱元和尙黃檗山を新開す。道者和尙の訓旨に従ひ徒を率ひて黃檗に掛搭す。隱元既に松堂に退くにより本菴に參ず。冬制三千指師浴主となる。三十四歳黃檗戒壇を開き戒頭となる。此秋母を仙臺に省し薙髮せしめ再び黃檗に歸り綱維を領す。三十六歳毛利宮内居士の請により防州大梅山に赴く。隱元法雲寺並に法雲彌遍海の五字を書して師に贈る。三十八歳秋再び黃檗に登り潮音、獨和、大處と共なり。三十九歳母の訃至る有り。四十歳大梅山に歸り、月餘事に因て退院して攝州住吉岩杉軒に止まる。四十一歳河内丹南郡長安寺主宗月、師の道譽を聞て寺を捨て懇請す。隱元祖翁の記を憶ふて法雲寺と改め大寶山と號す。是れより化増旺んにして備ふ可きの禪堂鐘樓等皆な美成す。前に天野山に在りし日堂前に菩提樹あり、其一枝を取り來て堂前に挿す。時恰かも夏季なり、衆皆大いに笑ふ。然れども枝葉繁茂し花實後に至つて燦爛たり人皆是を嘆異す。かくて四十七歳加賀金澤に行きて獻珠寺を開く。五十歳是れより前き木庵を訪ひ法雲に行き又獻珠に還へる。五十一歳獻珠を退き越前、近江、美濃、尾張を経て伊勢に至り朝熊山に到る。神主二階堂氏一寺を虛ふして師を請ふて安居せしむ。又熊野那智に赴き觀竹院に寓す。而して後法雲に還る。五十三歳、木庵寂し昆弟と共に喪に服す、偈有り。五十六歳江戸瑞聖を董す。六十歳、河北天龍寺開山。六十一歳、防長二州の大守大江氏吉就公に迎へられて東光寺を開く。六十七歳、摩耶山佛日寺を興起す。七十四歳、黃檗に行き悅山和尙を訊訪す。悅山是を喜び爲めに上堂あり。又師を請ふて上堂せしむ。八十一歳、元旦偈あり。八十五歳、勢州松阪の梅會寺開山となる。九十歳、八月廿三日末後の偈を説いて曰く、風顛手段九十年來。虚空落地大機現前と。泊然として逝く。世壽九十。法臘七十四。

以上は慧極明和尙行狀及同年譜の略抄である。詳細は上記の二書の外に語錄九卷、詩偈集一卷があり是を繕けば實に

興味津々たるものがある。其語録は法雲、獻珠、瑞聖三會の語録を主とし其他は雜録である。慧極は瑞聖寺に住したことは前記の通りであるが、其瑞聖寺について一言述べる必要がある。それには先づ瑞聖寺建立の次第を起さねばならぬ。瑞聖寺は青木甲斐守の建立であつて辻博士の日本佛教史（第八卷十章第五節）には次の様に書かれている。

新地の禁が嚴重になつたので、新地に寺を寺てることはできない。そこで古跡を買ふことが行はれた。寺社奉行記録（上野圖書館引繼本）に左の如き實例がある。

芝白金の瑞聖寺と云ふ寺がある。黄檗の木庵が住して居た。此の瑞聖寺の寺地の由來が右の寺社奉行記録に見へてゐる。それに據れば、芝の金杉に淨念寺といふ寺があつた。之が焼けて、その後が立つて行けないので、寺社奉行へ申達して、その焼跡を木庵が寛文十年に買ひ受けた。然るに境内が狭いので、何處かもつと廣い所が欲しい。茲に青木甲斐守重兼（端山居士、攝津豊島・川邊郡に於て一萬石を領す。）は深かく木庵に歸依して居つた。この人の屋敷が下落合にあつた。その屋敷と白金にあつた岡部左近といふ人の屋敷が青木のものとなつた。青木はこの白金の屋敷を金杉の元の淨念寺即ち今の木庵の寺と交換して、それで木庵は白金に移つた。それが今の瑞聖寺である。かくの如くにして古跡を買つて新しい寺が出来たのである。

以上の如き苦心の下に瑞聖寺は出来たのであるが、其後此の寺に三壇戒場を設くるに及び宇治の黄檗山と對立するのみならず遂に宇治黄檗山を凌ぎ第二の黄檗山となり、瑞聖、海福の兩寺が徳川幕府に對して觸頭となり非常の勢力が出来たのに反し、此の時の宇治の黄檗山は第五代高泉が住する直前迄萎微して居たのである。斯かる有力なる瑞聖寺に木庵の嗣として住したのであるから、慧極和尚の社會的地位の如何なるものかを知り得ると共に、如何に其盛名が大でありしかは、今日想像以上のものであつた。慧極和尚が瑞聖寺を董したのは、五十六歳であつたが白隠が訪ふた時は、前にも記した如く八十二歳の高齢にて、其の地位は益々高く一世を風靡していたのであるから、一無名の行脚

僧たる二十九歳の慧鶴上座たる白隠の相見が、如何様のもので有つたかは、容易に想像がつくと思ふ。

慧極和尚が白隠禪病治療の爲めに山中に行きて、終生の安坐をせよと、槇尾山を擧げて居るが、慧極和尚は四十二歳ごろ槇尾山に登つて、此地の安坐に適して居ることを知つて居たのである。是れの證として其語録に左の偈がある。

槇尾山に上る。

攀引して崔嵬に上れば。

峰頭殿臺多し。

松杉徒を用ゆる無し。

雲霧會て開かず。

僧古りて鬚眉白く。

山高くして岩石摧け。

優遊塵世の外。

終日獨り徘徊す。

槇尾山も今日とは異り、實に仙境とも云ふ可き幽邃の地であつた。併し乍ら白隠は此處を退去して來たので、今度は信田の蔭涼寺を指して行かしたのである。其理由は同寺と法雲寺とは距離的に餘り遠くないから、屢々來つて請益するに利便であることとしたのは、壁生草に書いてある通りであるが、慧極和尚は蔭涼寺の後見役と云ふ可き地位に有つたので、白隠を親類筋に預けてやる様な具合に蔭涼寺へ紹介しあやつたものと思はれる。それについては慧極和尚と蔭涼寺鐵心和尚との深かき關係があつたことを知らねばならぬ。それに先き立つて鐵心和尚の略傳を記す。

鐵心道印。始めの名は雲逸。姓は福地氏。伯州河村郡の人なり。幼にして穎異。嘗て經世の意なし。十六歳州の長

清寺の受公庵主に投じて薙髮す。二十歳遊方して東武の青松に止錫し東關の叢社に徧參す。卅二歳深かく祖風の漸微僧儀の稍衰を嘆じ、終に萬安と武の舟田山に藏れ、自ら誓つて曰く若し大道を洞明せず佛種を紹隆せずんば死すとも休せずと、趙州戴鞋の話に於て大いに疑を生じ、席に沾ざるもの數年なり。一日三州の大澤の室に在つて永平の正法眼藏を閲し開卷豁然として契悟す。偈有り曰く、

幾年此事掛心情。今日偶諧作麼生。

眼見耳聞非他物。溪聲山色發光明。

師己に力を得るも敢て自ら誇らず、孜々として韜晦するのみ。信の大聖素と師の名を聞きて頻りに請す。期終つて幡の全久に到る。天外一見して逸格なるを知り密に衣法を附す、師囑を受けて拜辭す。尋で永平に登り祖塔を禮し例に隨て公帳を受けて開衣す。丙子の年大聖を董し、翌年天外和尚本山を謝す。大外護藤公師を請じ席を繼がしむ。後に大檀濃の加納を領す。仍て寺を此の地に移す。癸未の年本山に就て結冬開堂す。辨香を天外に供す。四來雲集百廢俱に擧ぐ。正保乙酉院事を解いて桑山に退き居ること十年。會て青松の請有れども應ぜず。時に宗門事有り、江府の諸山師と萬安とを招く、公之を理さむ。爾れより二師の聲價朝野に聞ゆ。明曆甲午の秋、加能越三州の大守黃門菅公道化を敬し、師を延いて金城の天徳に任せしめ尊崇甚だ厚し。乙未の春、大明の隱元西來し長崎の興福に寓す。師太守に聞し往いて相見す。元接して舊知の如く、話宗門中の事に及ぶや具さに悟由を伸べ、且つ投機の偈を似めす。末句に至り元徴して曰く、無聲無色の時作麼生。師曰く八角磨盤空裏に走る。元曰く尙聲色裡に在り。師曰く、青天落地の時を待て和尚に向つて道はん。元曰く耳聾せり。師曰く開了也。元曰く了々々々時了とすべき無し。復た偈して曰く、來時跡無く亦た情無し。法々盡く晦昧より生ず。觀面然かも全軀現ずと雖も。人をして更に光明を見せしめず。次に道者を崇福に訪ふ。者も亦た偈を贈つて曰く、古佛明々たり銅鐵の心。風吹いて吼することを解し鈴吟に似たり。

眼見耳聞無師の者。白樺胡揮能く縱擒す。師留まること五旬、歸を告ぐるに及で元送るに三偈を以てす曰く。老大偶
 ま老大の漢に逢ふ。鐵心已に見はる鐵心の人。來々去々差路無し。一杖挑回す萬劫の春。歷盡す江山幾萬重。杖藜卓
 索活して龍の如し。苟も能く放下せば全く無事。振ふ可し西來教外の宗。何處の人か來つて竹扉を叩く。杖頭の一抄
 疾きこと龍の如し。衣下を抖擻して渾て物無し。聊か薰風を借りて子が歸るを送る。萬治丁酉の年、事に因て天徳を
 退き、東濃大井の邊に遁がる。木曾三留野驛の人民信恭し、等覺の廢寺を中興し開山の祖と爲す。

又泉州信田に往いて茅を結ぶ。時に隱元攝州の普門に開法す。師又往訪す、元其の再會を喜び清談益々親し。師曰
 く路遠く身老ひ毎ねに來り謁せんとするも願の如くならずと。元曰く心々の相ひ娑せば毫端を阻てず、長崎の相見と
 此間とはれ同か是れ別か。師曰く同に非ず別に非ず。元曰く何ぞ道はざる一番相見すれば一番新たなりと。師曰く耳
 聾し聞不見。元曰く聾を枉つて啞と作ることを得ざれ。師呵々大笑す。元偈を以て謝して曰く、洞水飄瀾し濟舟に漲
 る。來由没き處來由有り。派源還本同異に非ず。萬派千江此に至て休す。師泉山幽邃にして老を養ふ可きを愛し、用
 つて終焉の地となし扁して少林山蔭涼寺と云ふ。之に住すること廿年、常に一に枯坐を以てし恢いに壁觀の風を起
 す。海南參禪の學人咸く輻湊す。佛國の高泉偈を寄せて曰く、鐵心老宿本と無心。洞下當今第一の人、徳臘俱に尊し
 誰か仰がざる。新豐の一曲調猶新なり。極次韻して之を謝す。又泉をして永平古佛の碑銘を撰せしめて世に行ふ。
 己未の春師微恙を示す。一日を過ぎ徒に囑して曰く、老僧行かん。諸人宜しく勉刀し先聖を範とし慎で時弊に隨て眞
 宗乘を味す勿れと。皆遺偈を乞ふ。師曰く曾て身心脫落の頌を作り未だ嘗て人に示さず。今學唱して汝等の責に應ぜ
 んと乃ち曰く。一夜全提金剛杵。機前擊碎す鐵心の肝。大休大歇自ら知了す。枕上又た閑夢の安らかなる無し。遂に
 臥す。翌日侍者をして扶起せしめて坐定し脫然として化す。實に延寶八年正月廿八日なり。門人闡維して靈骨を收め
 少林に塔す。七十三夏の法臘。八十八歳の世壽なり。光重藤公桑山に就いて師が爲めに堂宇を建て、法器を備へ若干

の田地を寄せ高德を旌すなり。大慈山智勝院是れなり。(全久院誌)

鐵心の行狀諸僧史に載せて世に昭々たり。佐門備前守來て其城に主たるに鐵心城主に觸忤し鼓を搥つて退院す。是れ由り其の牌を屏卸す……南堂常に喟嘆する所獨り鐵心に在り。鐵心禪師は則ち宗の傑なり。功も亦た世に喧し、質の天徳に住し、篆を解いて瓊浦に如き疑を元道者に決す。泉州蔭涼、本州等覺、濃州智勝偕に開祖と稱す。吁あ一鉢飄然榮辱を關せざるは衲子の素分なり。鐵心一たび吾山に寔まづくも功宗門に多し。胡んぞ歷住の員より省かんや。感莫き能はず。是に由り諸を天正の石嶮和尚に謀り、前住牌を萬年山長久寺に樹つ。(韶陽山大聖禪寺記)

上記の二傳により鐵心和尙の概略を知り得るのであるが、萬安英種と共に當時江戸の諸山關三利と宗議を争ひ遂に寺社奉行に訴して時是に證として出府し、是に坐して擯罰せられた。所謂世に代語講録事件と稱せらるるもので、是たより更に天下に盛名を稱せらるるに至つたものである。又彼の月坡禪師も鐵心に參じたと傳へられ、其他洞下の宗匠にして鐵心に參じたる者甚だ多かつたのであるが、了然玄超が鐵心に加納に於て入室せし時趙州の無字を以てしたと記されて居るので洞家に於ける鐵心の宗風の一端が知らるる。

是等の所傳によりて慧極と鐵心とは何れも黃檗の道者及隱元等に參じたる共通の事情にあるが鐵心は慧極より約四十歳の年長であり年齢地位共に先輩であつた。延寶八年鐵心が八十八歳で遷化したる時に慧極は四十九歳であつた。斯かる關係なるが故に慧極和尚が白隠をして蔭涼寺に行かしためた事情が判明するのである。又慧極和尚が嘗て鐵心和尙を訪ふた時に作つた左の偈が其語録にある。

泉涼寺鐵心和尙を訪ふ。引有り。

頃ろ大慈愚公、過訪して話しは和尙の日用に及ぶ。誠に得難しと爲す。如今洞上の叢席、其の老成を推すに他に無し。余昔し長崎に在りし日、早く其の盛名を聞く、恨らくは未だ面晤を得ずと。今日特に丈室に來て喜んで麗眉に

對す。此を作つて贈り奉る。

特に來て尋訪す、鐵翁の禪。

八十五齡、齒尙ほ堅し。

一節高く持し、物外に超へ。

萬機普く接し、貪縁を絶す。

長松路を夾んで、深かく石を藏し。

高柳隄に垂れて、暗に煙を鎖す。

洞上而今、師第一。

玄風大いに振つて、南天に播す。

是は慧極和尚が四十二歳の時であるから、老爺と孫の對面位であつた。長松路を夾んで深かく石を藏すとは當時の蔭涼寺の幽邃を知り麗眉に接すと引中にある語は鐵心和尙の風彩を偲ぶことが出来るのである。

前記の如く鐵心和尙歿後に於ても、慧極和尚は蔭涼寺とは特別の關係にあり、白隠も亦蔭涼寺に於て何をか學び得ることがあらんかとの期待を以て行きしものである。壁生草には白隠は蔭涼寺に入りしが但だ禪規嚴烈なるのみにて、頗る鐵心の古風を失すと書かれているが、鐵心和尙寂後三十四年を経て猶も禪規嚴烈であつたとせば、それは鐵心の遺風深遠の致す所であると謂はねばならぬ。只だ古風を失ふとは、鐵心和尙寂後の蔭涼寺は、後嗣其人を得たりとは云ひ難く、第二世實參か或は龍溪院の輪住であつたらしく、貞享三年七月晦日第三世洞外壽仙が未だ入寺せざる時で、主董を欠いていた時の様である。猶この事については後記する。斯くして蔭涼寺に居た白隠は、一日衆に隨て後園を灑掃し、壽鶴道人と相識るに至つたのである。此のことは曩きに年譜により記した通りであるが、考へて見ると

壽鶴が久しく鐵心和尙に侍したと記せることよりすれば、此時は其寂後三十四年經て居るので、それを加算すると壽鶴は此時六十歳位になる老人と推定され、白隠が壽鶴道人と記せるに至極相應はしく感ぜらるるのである。而して此の年齢推算が當つて居たとすれば、當時の白隠よりは相當の年長者となる勘定である。茲の處を壁生草には次の様に記してある。

……篠田の蔭涼洞家の禪堂を指して暫らく掛搭せしむ。其の時同單五十餘員、隣籍に壽鶴上座有り、又有道の一員の上士なり。互に心を合せて舊相識の如し。或る時互に誓つて七日七夜切心不臥、脩竹を三尺に切て竹筥と爲し、對坐の間に横へて、若し片時も眼を合するものあらば、竹筥を把つて眉間の間を破せんと、鐵脊梁を豎起し、齒を切りしぱりて、兩箇默然と坐し、七夜滿夜に到るまで少しも目引きもせず、兩手互に彼の竹筥に觸れず。

とある。此の記述によれば、壽鶴は白隠和尙年譜に記されある壽鶴とは大いに異り、現實性に富んでいる。且つ老人とは思はれず、壁生草の壽鶴と、白隠和尙年譜にある壽鶴とは殆ど別人の觀をなすのである。然らば年譜は一種の文飾の施されたる壽鶴とも解せらるるのである。果して何れが正しいのか。而して例の和歌の如きも此の文飾主義思想の所産ではないかと思はれる節がある。壁生草によれば次の通りである。

其頃一夜大いに雪降る。林葉に洒そぐ其の響き清閑なり。感情に堪へず、和歌の眞似して喜びを演ぶ。

聞かせばや篠田の森の古寺の早夜更けがたの雪の響きを

とある。此の和歌は語調から云ふも、中々よい和歌であるが、少し穿鑿して見ると泉州泉北郡の東部の地は、相當溫暖の地であつて、冬期と雖も餘り雪の降ることは殆どない。又珍らしく此夜降雪があつたとしても、林葉に洒そぐ音がする程の雪が降つたものかどうか。雪の事は兎も角として、蔭涼寺は後に記すが、鐵心和尙が開創した新寺で、古寺ではない。雪と古寺とを用ひたことは歌としては面白いけれども、現實とは相違する和歌と云ふことが出来る。是

等のことは何れでもよい事とするも、壁生草にある次の事は甚だ奇怪に堪へないと思はるのである。

其の頃蔭涼寺堂頭和尚内評あり。予に囑して蔭涼に任せしめんと欲す。蔭涼は福地にして所領あり。毎夏四五十員を掛搭せしむるに足れり。予竊かに謂へらく、一回日州に涉つて古月和尚に參謁せんと。是の故に心一決せず。

前記の如く當時の蔭涼寺は住持空席にて後に三世洞外壽仙が住持となつたが、福地にして所領あり且つ由緒のある此の寺に、濟下の行脚僧白隠を、後住たらしめんとしたと云ふ、堂頭達の内評もどうかと思ふが、本人たる白隠が第一心決せずなど、此際、迷言を並べて居るのは更にどうかと思はざるを得ない。然し乍ら八十二歳になりし白隠和尚が自傳を書く場合、正直に其の心情を書いた一面から云へば、虚飾がなくて人間味が溢れて居て此の點は誠に有り難いことと云へぬのでもない。壁生草は次の様に續けて書かれている。

久しからずして請暇して獨り京師に出づ。其時壽鶴獨り密かに相送る。二里餘を経て別る。

壽鶴が別れを惜しみつゝ、送つて來た様子がよく現はれている。蔭涼寺は高い丘陵の地であつて、それを下ると狐の傳説で有名な信太の森が目の下にある。遙か眼を放てば大阪灣を望むのである。多分此の邊で袂を別つたものと想像する。

由來白隠和尚の書いたものには異人的の人物が出現する。白幽然り。年譜にある壽鶴亦た然りである。それ故に實在の人物か、假托の人物かを疑ひ度くなるのであるが、私が昭和三十六年三月同寺を訪問した際祠堂牒の名簿を披見したらば當寺有功靈名記の中に

一、銀拾貳兩　　妙迎禪定尼　　壽鶴母

とあるので、壽鶴は實在の人物に相違なく、又其母が銀拾貳兩を納めて居るところを見れば大體身許も見當がつくのである。此の祠堂牒は元祿十四年次辛巳正月晦日、三世洞外壽仙が記したものである。猶こゝに蔭涼寺とは如何なる

寺であるかを記して見る。

蔭涼寺は和泉國泉北郡信太村尾井山之谷（現大阪府和泉市尾井町）にある曹洞宗の寺院である。和歌山線の信太山驛下車。約四キロ位山の手に行くのであるが現在自衛隊の演習地にて舊陸軍からの用地の側であり、丘陵が開けて居るが當時は杉松が老生して幽邃の地であつたと思へる老木が少し残つて居る。埜域も甚だ廣ろく、附屬の寺領も多くして富裕を以て知られた寺であつたが、戦後の農地改革により是等の田畝は皆開放されて仕舞つたとの事である。

蔭涼寺は寛文元年鐵心道印が此の地の森田與惣兵衛等と相謀り、十方の喜捨を得て創建したものと云われて居るが最も有力なる檀徒は河村瑞軒であつた。本堂は豊臣氏の伏見桃山城の古材を用ひたとの事で廊下の天井には血痕歴々として残り血染の天井と云はれている。河村瑞（隨）軒は江戸初期の有名なる土木事業家であつた。初め家貧なりしも資性慧敏にして初めは商業によつて産をなし、其後土木事業に従事し、權門に出入遂に幕府の召に應じ、士分に列し祿百五十俵を賜はつた。瑞軒は運輸、航海、治水の術に長じ幕命によつて大阪安治川を治さめ、淀川、長柄等を修し氾濫の憂を斷つた。又奥羽大阪間の航路を改善し、覆没の難を見ずして航路日敷を短縮することに成功した。是等のことにより家産大いに擧がり一大富豪となつたのである。斯かる富家なりし故寺院の開創などは容易のものであつた。瑞軒の墓は鎌倉建長寺にあるが生前鐵心和尙とは厚知であつたと見へて、酒井雅樂頭、久世大和守の使者として、鐵心和尙を芝の青松寺へ迎へんとして使者に立つたことがある。此の瑞軒が蔭涼寺の開創には専ら力を注いだのであるが、他に大阪の富豪鴻の池家も亦た支持者の一人であつたと見ゆる。當時の祠堂牒有功靈名記によれば

一、銀壹貫目 得雄玄了居士（河村十右衛門。瑞賢の父）

慶安 三庚寅六月十六日

一、同壹貫目 梅巖妙林禪尼（河村十右衛門母）

明曆 三丁酉十月十二日

一、同五貫目 當時開基、英直院傳籌瑞賢居士

元祿 十二己卯六月十六日

一、同貳貫八百五十 仁屋永寛居士（河村瑞賢の子息）

延寶 七己未十二月十八日

鴻之池分は略すが左記の二つは注意すべきものである

一、銀百參拾五兩 木會福島。小野勘左衛門

一、銀拾貳兩 妙迎禪定尼（壽鶴の母）

壽鶴の母其他は省略するが、木會福島の小野氏は鐵心和尙が木會に在住されし緣故であると考へらるる。

白隠和尙が坐禪したと云はるる禪堂は現在には空屋になり物置同様であるが間口六間、奥行五間以上の建物にて入口には大きな木彫りの横額がある。草書にて大歇堂と書かれ鐵心和尙の筆になる立派のものである。私が此の堂前に於て合掌したが往時の幻想が眼中に浮んで古人刻苦のあとが偲ばれたのである。寺後に鐵心和尙の塔所があり是にも合掌禮拜したが立派なる塔所であつて塔側にある數株の老松は往時よりの面影と思はれた。月坡和尙が鐵心和尙に參ぜられたことは前に記したのであるが、月坡禪師語録は左の偈がある。

薦鐵心禪師

渾身鑄作鐵心肝。定力老來人轉難。

頭上戴鞵游法界。洞源浮筏涉禪關。

百年槐夢眼前覺。一世芳名耳裏殘。

我欲師師不得。對靈話出舌根寒。

白隠が蔭涼寺に入りし事情と慧極和尚の關係は前に記した通りであるが何故慧極和尚に白隠が法を求めたかは猶其他にも原因があるものと思はれる。それは壁生草にある高田英巖寺に於ける人天眼目會の條を見ると、左の記事がある。時に越後に道人あり。惠極和尚印可の人なることを聞いて、英岩の眼目會に事寄せて、翌くる春同行三人を促して、越後英岩の輪下に到る。

是によつて見れば、英岩寺の性徹和尚は慧極和尚の法嗣にて、白隠が當時其名を聞いて、其の大會に行きしところを見れば、性徹和尚の名聲も既に世上に聞へたものと見ゆる。又越後に道人ありと白隠は書いて居るのである。斯かる次第なれば、其師たる慧極和尚は更に當然往訪の目標となつたものと解せらるるのである。

以上蔭涼寺を問題として、記し來れる種々の事實を綜合考察すれば、次の様な結論に到達するのである。

一、白隠が此の様に正受庵以後に於て、各所に求道の行脚をなし續けたことは、正受老人の處に於て大悟したと言ひ乍らも、夫れにて足れりとなし得べきでなく、更に修行の要あるもので、修行と云ふものは中々容易のものではないと云ふこと知らねばならぬ。世の中には「早や悟り法」とか「一週間見性法」などを聞くが、我が眞禪論の主旨に沿はないものと思ふ。

二、白隠禪の法系と云はるる現在の參禪求道者は志を遠大にして、白隠に倣つて苟くも法の存する所、道の存する所ならば曹洞であれ黃檗であれ、又は其他の學匠であれ、毛厭ひすることなく參叩して、博ろく且つ深く其法根を養ふ可きものであつて、安易の腰掛骨休みをすべきものでないこと。古るくは趙州の芳躄もあるが更に白隠和尚と無着和尚との話もあるが是は他に別記する。(大乘禪誌、昭三七、三號に掲載)

三、白隠が正受老人の會下には、僅かに八ヶ月位の短期間の掛搭なりしも、其法嗣と稱することが可能なること。

故に必ずしも隨從期間の長短は深かく論ずるに足らず、要は得法の如何にあること。(是については別に詳論がある)

四、白隠は斯の如く曹洞、黄檗の二師を通じて二宗の法恩を享けていることは、前記の通りであるが、白隠の法孫たる吾等は是等兩宗に對しても、敬意と報恩とを忘れては相濟まざること。

五、右の法恩に對し白隠は報恩の實をなしたると思はるること二つあり。その一つは洞山五位商量の確立にあり、他の一つは格宗淨超への傳法である。

以上は私の管見であるが、格宗淨超については少しく補説の必要がある。白隠年譜寛延二年六十五歳の條に槩門の格宗來り參ず。曹洞の五位を請益して訣を受けて還へる。後ち槩山に鶴林の宗風を分施す。

とあるが、格宗淨超とは如何なる人であり、其の訣とは果して如何なる次第なりしやを明らかにせねばならぬ。左に格宗淨超の略傳を記す。

隱元—大眉性善—梅嶺道雪—衝天元統—格宗淨超

師は伊勢多氣の人。享保十五年十月十五日嗣法。同郡相可村、天照山法泉寺に住す。黄檗第二十二代住持。天明六年六月三十一日晋山開堂。寛政二年八月二十一日住山中示寂。世壽八十。傳ふるところによれば、天明五年九月三日江戸着。六日寺社奉に出頭。黄檗山第二十二代住持の命を受け、十五日繼席御禮登城。十九日御暇登城。以後入院仕度料(入寺用銀)借用交渉の爲め滞府。千兩借用成る。天明六年五月二十四日江戸發。六月九日黄檗山塔頭東林院に入り、六月二十一日晋山開堂。天明九年三月八日より十五日三壇戒會執行。(第二十二會)

當時は徳川幕府の寺社奉行が宗政の擔當者であり、僧侶の任免は幕府によつて行はれたものであるが、黄檗宗は開山當時より徳川幕府の庇護によつて維護せられた關係からして、幕府とは特別の間柄にあつたと見ゆる。而して黄檗

山は隠元開創以來、中國僧を以て住持とする慣例なりしが、後に至り第十四代龍統元棟より本邦僧に改められ、格宗淨超も第二十二代の住持となつたものである。此の當時の黃檗山は甚だ衰微して居たのであるが、格宗淨超の住持によつて其類勢を挽回したと云はれているから、格宗淨超の人物を知ることが出来る。

格宗淨超は寛延二年三十八歳の時、松蔭寺に來り、白隠の室に入り參究怠らず、遂に洞山五位の訣を受け、後四方に周遊して、後に黃檗山に住持したのである。格宗淨超は此の時七十五歳であつて、白隠寂してより十八年後のことである。爾來黃檗山に於て白隠の宗風を擧揚し、大いに名聲を揚げたとのことであるが、斯かる次第にて白隠は蔭涼寺に於て受けたる曹洞宗の法恩も、格宗淨超を通じて併せて報ずることを得たのである。蓋し不思議の法縁と云ふ可きと同時に、白隠和尚にとりては此の上もなき本懐と云つてよいであらう。

猶此の外に黃檗山第二十五代の住持となつた華頂文秀も白隠に參じた人である。格宗淨超、華頂文秀に關する資料は少ないが、黃檗本山にある「知客寮須知」によれば知り得るものがあるかと思ふ。

註(1) 此の小文は拙稿眞禪論の一部分です。

(2) 慧極、鐵心兩傳については注釋を要する箇所多數あれど省略した。

(3) 慧極、鐵心等には和尚をつけ、白隠を其儘とせるは當時の白隠は慧鶴の修行時代であつたからです。

(4) 別記とか、他に詳論とあるは拙稿眞禪論稿中にあるの意味。